袖珍仙方

奈良宗哲

正德三年

1715

ヤ 9
1152

袖珍仙方序

古今著方之書志在濟世仁人之心亦天地好生之心也諸病之救急經驗之單方散而有諸方書今錄之名袖

西村元佑圖書

珍仙方。窮鄉下邑。於藥物鮮
有之所者。未必無小補云。

正德甲午十二月

法橋　奈良宗哲

袖珍仙方叙

天生地成人長養其間元氣云榮衛迺
則藥餌無所用也一遇有寒醫療所須
其急如饑渴之於飲食欲須臾懈而不
可得經方之有關乎性命亦大也奈良
宗哲氏業醫名時以聘請餘暇披尋不
倦嘗撰人家日用得之易有足以治疾

者隨類纂入彙而成編蓋欲詔之窮鄉
遐陬請醫致藥難于卒辦席門茅屋之
下抱疾無告者其爲惠不少也雖所具
未若他書多率皆方之已驗者可濟實
用也夫藥貴於愈疾若能奏効何更求
難得者貴遠賤近哉行之通邦大色亦
个人所檢閲不廢也宋張相公進蕭嶽
九有言誰知至賤之中有殊常之効此
編爲或近也余嘉著述意爲之叙

正德癸巳九月一日

稻若水書

凡例

一古來ノ明醫方書ヲ撰述スル二多ハ易簡方ヲ載ス是救急ノ意ナリ此書專千金方ヲ基シテ歷代明醫ノ述ル所ノ易簡方ヲ集メ記ス遠國離嶋醫藥ナキノ地病テ死ニ至ルト雖氏治術ナク唯天然ニ任ス洛陽ハ富饒ノ地醫藥之カラズト雖氏一切ノ急證又ハ深更ナトニハ醫ヲムカヘガ

タシ其上至貧ノ人ハ醫ラムカヘカタク
重病ヲ受ト雖ドモ徒ニ日ヲ過シテ終ニ
死ニ至ル者多シ予深ク歎之故ニ此編ヲ
ナス惣シテ此書ニ記スル所ノ藥方ハ古
來ノ明醫經驗ノ藥方ニシテ少モ驗ナキ
藥方ニ非ス覽人深ク尊信シテ用ヘキ者
ナリ故ニ藥方ノ後ニ各出書ノ題号ヲ記
ス猶不審ノ人ハ本書ニテ考ヘシ

一此書諸病悉ク易簡方ヲ記ト雖ドモ病ニ緩
急アリ人ニ虛實アリ醫ラムカヘテ脉證
ヲ祥ニシテ治ルニハシカズ此書ニ耽リ
テ醫ヲカロシメ思フベカラズ此書ハ唯
偏國或急症又ハ旅人若ハ至貧ノ人ナド
ノ爲ニスルノミ
一病門ノ次第ハ萬病回春ニ隨フ然レドモ古
方書ニ易簡方ナキ病門ハ闕之卷末ニ雜

病門ヲ附ス是間春ニ載ザル病ヲ集記ス

一諸方書ニ記ル處ノ藥方繁多ナリ然レ𪜈今此書ニ載ル處ノ藥方ハ民家戸ニ有ル所ノ品ノミヲ載ス故ニ藥方多カラズ

一此書ニ載ル藥種四季戸ニ有ル品ヲ以ス春有テ夏無ク秋有テ冬無ノ類タトヘバ酢瓜茘ヲ治シ李果唆ヲ治ルノ類ハノセズ

一兼テ修蓄ノ類タトヘバ隔年瘧ヲ治ル

ノ類ハノセズ唯急ニ調フル藥品ノミヲ記ス

一生類ヲ殺シテ藥トスル類ハノセズ孫眞ハノ生ヲ去ルヲ遠シト云ノ思フ故ナリ

一墮胎ノ藥ヲ載セズ堅志ニ白牡丹女墮胎ノ藥ヲ賣テ現ニ惡報ヲ受ト云ヘリ我儒モ亦不仁ノ事トス故ニノセズ

一古方或一斤二斤三斤ト量目ス今一

二錢或一二盞トス是專醫學正傳ノ例ニ
效フ
一此書童蒙兒女見安カラレメント思フ故
二國字俗言ヲ以テ記ス不學庸忽ナリ過
ルヲ多カルベシ後君子正之幸甚

袖珍仙方引用書目

外臺秘要　方勺泊它編　摘玄方
初虞世必効方　癸辛雜志　雲林神穀
醫宗必讀　明醫雜著　衛生易簡方
醫方大成　救急方　集霊方
食醫心鑑　魯府禁方　孟詵本草
種杏仙方　藏器本草　續十全方
余居士選奇方　事海文山　法生堂經驗方
仲景傷寒論　仲景方　百一選方
迫効方　霊樞經　瀕湖集簡方
李絳兵部手集

病源候論　唐韋迪獨行方　梅師集驗方
千金方　陸氏積德堂方　葛洪肘後方
冠氏衍義　古今醫統　南陽活人書
濟世秘覽　傷寒類要　婦人良方
本事方　本草綱目　楊起簡便方
王生編　陳氏經驗後方　醫書大全
奇効醫述　保嬰撮要　壽世保元
廣五行記　食鑑本草　九籥衞生方
蘇恭本草　已志　溫隱居海上方
名醫類按　道藏經註　物類相感志

范汪東陽方　入平聖惠方　傷寒總法
食療本草　赤水玄珠　貞元廣利方
趙宜眞濟急方　劉長春經驗方　證治準繩
邵眞人經驗方　全幼心鑑　活人心統
吳氏益奇疾方　證治要決　道藏經
危氏得効方　儒門事親　修眞秘旨
傳心適用方　陳直奉親書　孫氏集驗方
嬰童百問　周憲王普濟方　楊氏家藏方
仁齋直指方　內經素問　加宜方
遯齋閒覽　蘇頌圖經本草　蕭顯明梁史

御藥院方　醫學六要　繼洪濟寮方
延年方　周密清然齊抄　朱端章家寶方
活幼口議　陳言三因方　類經
萬病回春　集玄方　醫林集要
子母秘錄　南史　延年秘錄
醫學入門　玉機微義　孫氏仁存方
普濟產寶　丹臺玉案　楊氏產乳
朱氏集驗方　十全博効方　產書方
唐瑤經驗方　臞仙壽域方　熊大古冀越集
心傳方　典權藥性論　譚氏小兒方

陳延之小品方　唐仲舉方　嬰孩寶鑑
小兒秘訣　幼幼新書　隨身備急方
外科精義　奈仲南永類方　醫學正傳
癘瘍機要　簡要濟衆　李樓奇方
傅氏活嬰方　外科正宗　吹劍續錄
正體類要　開寶本草　談埜翁方
吳旻扶壽精方　證類本草　北夢鎖言
資生經　聖濟總錄　徐伯玉方
大平御覽　鐵圍山叢談　口齒類要
陳日華經驗方　程充丹溪心法　古今秘驗方

斗門方　延齡至寶方　孫用和秘寶方
錢相公鑒中方　濟世全書　金匱要畧
瑣碎錄　崔氏纂要　鬼堅志
剡跋假日記　群談採餘　領要方
五行書　通變要法　丹溪怪病單
鍼灸聚英　甲乙經　博物志
王氏農書

書目終

袖珍仙方目錄

一丁 中風　風賊よわりころ
二丁 傷寒　寒氣表より裏へ入り
三丁 感冒　ひいきのくすり
四丁 中寒　寒氣よわりころ
五丁 中暑　夏わつけよわり
六丁 食傷　食ざつとなり
七丁 中毒　何を食てわりころとしてよべわるゝバ此所をそうんかへ
　　そのわりくるりめよりさくとりと用べし
十八 痰　のどより痰ぶる
十九 咳嗽　せきのなり
二十 瘧　ちりけなり
二十一 痢病　大用血すじつこに
二十五 痢病　下るなり

十七 泄瀉 みづくだくだるなり

十八 霍亂 ちゅうさこしあげもくだくしせぬなり

廿 隔 ものの通ざるなり

廿 嘔吐 たべものをはきすること

廿一 呃逆 ものをはきたがるなり

廿二 呑酸 ときどきすくびのひきていうやまひなり

廿二 譫雜 ひとりがくやまひなり

廿三 痞 ひとりそれつえなり

廿三 氣臀 氣のつきなり

廿四 水腫 一身ともくくれ

廿四 鼓脹 手足はつるみぐく腹なり 大よりそれさる病なり

廿五 積 ひとりそれとまるわるていたむなり

廿六 黃疸 惣身黃なる病なり

廿七 吐血 血をはくなり

廿七 衄血 鼻血のあるなり

廿八 諸血 一身に中ごとにとし血のあるなり 春秋冬のうつるとき時行の血しるし汗なり

廿九 下血 大便のあとさきに血のかたまり

廿一 汗

廿一 小便血 痛なく小便に血いるなり

廿二 瞑暈 めまひ病なり

廿三 麻木 身のそびれて病なり

廿三 狂 きちがひのなり

廿四 癇 俗云ちりやくり

廿四 健忘 物をわすれする病なり

廿五 驚悸 うちあれすまいちがくやまひなり

廿五 不寐 ねられぬやまひなり

廿六 邪崇 つとりのくるなり

廿六 小便濁 小便に濁る病なり

世七 遺精 眠てある内ゝ精のながるゝなり 俗云しぶきのなり
世八 遺尿 小便ながるゝなり
世九 小便不通 小便通ざるなり
世十 大便不通 大便通ゼざるなり
世十一 大小便不通 大便小便共に通ざるなり
世十二 痔 尻の穴ゝむなり
世十一 脱肛 尻の穴ゝ出いでしやまひなり
世十二 虫症 ひきつれなり
世十三 頭痛 づつのいたみなり
世十四 髭髪 ちゝけやまひなり
世十四 面 くものやまひなり
世十五 耳 耳のやまひなり
世十六 鼻 鼻のやまひなり
世十七 口舌 口舌のやまひなり
世十八 牙齒 齒のやまひなり
世十五 眼目 目のやまひなり
世十五 咽喉 のどのやまひなり
世十五 瘻瘤 こぶのやまひなり
世十五 腹痛 はらのいたみなり
世十五 脇痛 ちきのいたみなり
世十五 腰痛 こしのいたみなり
世十五 疝氣 脇ひきつるやまひなり
世十五 婦人經閉 月水の通ゼざるなり
世十五 血崩 月水おびたゝしく通じて止ざるなり
世十五 帶下 おこりなり
世十五 產前 子をうしまんなり
世十六 產後 子をうしまんなり

六三 乳病 ちのやまひ

六四 前陰 小便道の病

六五 小兒初生 生れやうの時

六五 不乳 生れおの乳なのこと

六六 不尿 生れおの小便出ざる

六八 大小便不通 大便小便通ざる

六六 撮口 口と口唇聲出ざる

六六 臍瘡 へそのうちのあるもの

六六 臍風 臍より風引やまひ

六六 口瘡 口中ゆまひ

六七 軟癖 なろぶれすたり

六七 丹毒 そやくさのもの

六八 夜啼 よをさのうすなり

六八 盤腸 うとうそてさ

六九 語遲 ものいやすをそ

六九 驚 なること

六九 痘 くさのもの

六九 痘 をもはしかの

六九 痘 瘡をこのひもの

七一 疔 元かさ如来りの

七一 外科癰 ちうにてできる

七一 外科瘤 それりのなり

七二 便毒 よこねのくるる

七二 下疳 陰茎のやまひ

七二 便毒 ねのくるる

七二 腰瘡 くびきれる

七三 疥瘡 ひびんぎのもの

七四 癜風 ちまだのもの

七四 厲風 ろうのもの

七四 諸瘡 ものいやすもの

七八 杖瘡 打撲のもの

七九 金瘡 切ればど血とめるう
八十 湯火傷 やけどるう
八一 虫獸傷 虫のにしらとと獣のにかまるるう
八五 骨鯁 のどにかゝりてのちらるするう
八七 五絶 縊て死しうと覺て死しうと水よとりて死するとるき死しうと凍死しの類
九十 中惡 死人の毒氣にあたらるゝまんるう
九一 雜病 ゆくのゆまうをうるものう

目録終

袖珍仙方

法橋 奈良宗哲 撰
門人 前川正哲 校正

●中風

○中風口噤恍惚として手足ちぢれ或ハ腹中痛或ハ息絶又息出るよハ

伏龍肝 かまくの下の灰のやけ切るもの を女粉にして水茶碗

ゑ一ぱい半入一ぱいに煎用てよし

千金方

○又方

・艾を女水茶碗ゑ二ぱい入一ぱいゑせんじ布

切と浸て布切をあらあらの脇をあらら
てよく冷をバ度〳〵かへ用ゆ　陸氏積德堂方

○中風腹痛ハ
素湯ハ塩をとそて用ゐ痰を吐て早速
よいくすみやしなり　肘後方

○中風口噤らにハ
芥子　そうゑ醋茶碗ハ二ちい入一ちいハ
領頰の下につのてよし　冠氏衍義

○中風口喎らハ

○天茗茶醋ハ
そうねて炒てらねて泥のごとくし頰ハ
塗左へゆくときハ右へ右へゆくときハ
左へハ左の方へゆくし　冠氏衍義

○中風口喎斜て二年し三年も愈ざるハ
青松葉五ゑ細剉絹の袋ハ入酒五合入煎て
二合半ハなりしる時松葉を取出してもて酒
ぐりぐりサーづてのむべし　古今医統

○中風眩ハ
蟬退　弐ゑ少〳〵炒て粉にして

酒にそのひべし

○中風夢中の様なるるよハ
香油 生姜汁 等分ニ合
て少づゝ用てよし

古今医統

千金方

傷寒

○熱つゝさし頭痛るよハ
艾三ゝ 水茶碗ニ三ツ入一ツにるなんぢ
りそうよし

肘後方

○又方

葱白鬚とゝもニ 生姜三分 水茶碗
ニ三ツ入一ツに煎用てよし

南陽活人書

○傷寒病付て二日三日ニ内ニハ
葱白廿本 細ニ刻 白粥の中へ入よく煮て醋
少入て食べし 汗出てよし

済生秘覽

○懐妊の傷寒熱つよく發狂るよハ
艾五ゝ 酒茶碗ニ一ツ半入一ツにるなんぢ
りひてよし

傷寒類要

○又方

葱白九本水にてせんじてのむべし

葱を食べし

○懐妊の傷寒人をも見まどひ夢中のごとくなるよハ

傷寒類要

艾十匁醋にて至極熱く炒つけて絹に包腎の下を熨暖てよし

○陰證の傷寒手足冷て腹痛するハ

硫黄 つりむのもの きるゝ 艾三分つゝ

せんじ用てよし

婦人良方

本事方

○傷寒を病て間のもの女を嫁して傷寒の毒氣を傳染熱つよきよハ

両方とゝとよ尖ゝとろ鼠ゝ屎非の根煎じのみてよし

活人書

●感冒 がいさつるもの

○風引くるよハ

胡麻 黒胡麻 黒胡麻 武ゝ成程

よく炒わるさ時ハ白胡麻にても用べし

汗をかくべし

酒にてのむ物を著て休べ

本草

●中寒　寒氣よわるるなり

○卒よ寒氣よわるる唇青く卵縮六脉なるごとくなるハ

葱一把根と青き所とを切て捨白きをわるく

わるり脇の上よりをきて艾をもて幾度も灸

すべし葱燒もえバ灸くゝ入て手足わるく

まるまで灸してよろし　南陽活人書

○又方

湯もて芥子をとき脇の中よりいるべし

きる物の外より手拭を湯につけちぶりてわるく

むべし冷もぬるくなるべし手拭を湯よりあげ

わるくしぼべし　楊起簡便方

○寒氣よわるり手足冷て腹痛よハ

艾五分わるき湯よりとり脇の中に入て

ち　生生編

○又方

黑大豆五合炒て皮を捨酒茶碗よ三盃入

一盃よせんじ酒をのむべし　古今医統

○又方

胡椒五分酒まして是をのませ

古今医統

○又方

塩と赤小豆に一くいわつくり布切まつみ
脾の上をあらひむべし塩冷ばいくゝびも
てあらひ

古今医統

中暑

○暑氣よわゝり病あり
胡麻 そゝあつく炒 新汲水まして

○暑氣よわゝり頭痛するハ
砂糖を水まして

古今医統

○暑氣よわゝり既ニ死ともるハ
新汲水少し鼻の孔へ入て扇ぎ
あつ〻り至極重き病人なゝハ日もあつ
さる地を一尺あまりかりて其中へ水を入て
ふ〻つか〻其水を鼻の孔へ入あつ〻少も水をの
ましあつのあつれハ水を飲ハ死を

古今医統

経験後方

○暑氣にあたり咽渇き死ともるよハ
路上埃土をかきそゝうへのもゝ水を用ひし　古今医統

○旅人又ハ農夫日にてゝされて暑氣にあたりすぐ
に死ともるよハまづ其病人を日陰につ
きゆるさわをのけ袖さを垂日向の土を
脇のぐるりに堤のごゝくにをき外れ人に病
人の脇の中へ小便をさゝをべしさらまち
よう　医書大全

○又方
生姜と蒜とを搗き湯に入うつぐべき
湯ともに飲べし　古今医統

●食傷

○一切の食傷に
地漿水　日れあらぶる地と一尺あまり堀てうれ
中へ水をあらかじめ清くなり
のみてよし　本草

○一切の食傷腹痛にハ
塩湯多くのみてよう　奇効良述

○小兒食傷ハ
鳥の羽根咽ヘ入て探て食物をとらさ
てよし
保嬰撮要

●中毒 何を食てあらゆるくるしむ覺わるべしそ
うたのあらゆるものようを素を用べし

○一切の毒を消ハ
黃龍湯 雪隱のつぶれ水ハ飲てよし
藻蒙本草

○砒霜石の毒を消ハ
黑大豆ゑんどのんでよし
肘後方

○酒者多く過して腹脹るハ
塩を齒よりて湯を飲べし如此二三遍とれ
て雪れ消るがごとく脹ゆ
壽世保元

○酒食のあらゆるハ
黑大豆 或ハ白大豆 半合つゝのごくせんど
のみてよし
廣記

○酒を過して嘔あるハ
赤小豆煮て食てよし 煮汁をとのうて
よし
食鑑本草

○酒ノ二日醉ハ

黒大豆煎じてのむべし　本草

○又方
赤小豆せんじのむべし　本草

○又方
生蘿蔔ちろり汁飲てよし　本草

○燒酒多く飲て醉醒ざるハ
病人を寐さうして豆腐を薄く切貼れ上ゝ
なべをけて醒ろ　本草

○燒酒ゟ醉て死ざるゝ時ハ
汲たての水ゟ病人の髪をひろ〳〵手足ゟ
水をうけてよし　本草

○酒を過して腐ざるゝハ
石灰を醋にして丸じ用べし　本草

○又方
五倍子　女のくろくてくらゝ時ハ
よし　本草

○一切の魚の毒にあたるゝハ
黒大豆せんじのむべし　衛生方

○河豚の毒よわらるるハ
胡麻の油のみてよし
本草

○又方
黒大豆をこのみてよし
本草

○又方
地漿水 日のあたらぬ地を一尺ほどほりて底中へ入るきるまでかきまぜうるかす
のみてよし
本草

○一切の魚の酔たるハ
陳皮をこまかの煎じ飲てよし
肘後方

○牽魚蛤蜆烏賊等くれ蟲魚の毒よわらるるハ
醋小茶碗に一盃のみてよし
本草

○又方
胡麻油一盃のみてよし
本草

○又方
胡椒食てよし
本草

○又方
胡椒の粉のみてよし
本草

○蟹の毒よわらるるハ

紫蘇の葉じる汁のみてよし或は生れ紫蘇

食てもよし　医統

○卵又雞の毒はらりうるよへ

酒のみてよし　医統

○鳩食て毒はらりうるよハ

葛の粉水にてのみてよし　医統

○こつ又方

生姜汁のみてよし　医統

○六畜の肉を食て毒はらりうるよハ

伏龍肝（竈の中の土）はらりうるよハ　そのまま

てよし　千金方

○又方

小豆黒焼みて水にてのみてよし　千金方

○自死うる獣の肉を食て毒にはらりうるよハ

古頭巾を垢をもて湯にてのみてよし　千金方

きをもてのみてよし　古頭巾とハ敵のこと

○諸菜の毒はらりうるよハ

人乳　童便　六七歳までの男の小便なり　等分に合て

○一切の菌の毒をけすにハ
小便のみてよし　海上方

○又方
地漿水　日わたりする地を一尺ほり堀て其中へ水をあつめ澄たるを
のみてよし　時後方

○又方
金銀花　をよそのるろくをんを
のみてよし　本草

○柿李蒲萄東柚林檎桃梅惣して一切の菓子ハ
毒をわるくするのよハ
胡椒の粉白湯にてのびべし　己志

○一切麺類の毒をけすにハ
生蘿蔔の汁のみてよし或ハ食て
よし　道藏經

○腐肉の毒をわるくするにハ
生蘿蔔のかろ汁のみてよし又食て
もよし　醫統

名医類案

○茶を多く飲て腹脹らるゝハ
醋をのゝてよし
物類相感志

○一切の藥に毒あらるゝハ
甘草食てよし
千金方

○痰
○一切の痰證ハ
堀湯のみてよし
外臺秘要

○痰切れぬるゝハ
浮石粉にして白湯にて飲よし
本草

○又方
五倍子 つくろ〳〵ときこなして
白湯にてのむよし
本草

○又方
生姜をすりくだき白湯にてさうひくく
てよし
本草

○水のやうなる痰出るゝハ
艾を食常にくゝと煎じ用ゆ
本草

○一切の痰證〳〵愈ざるゝハ

陳皮 みかんの皮なり 四拾目水茶碗ニ五盃入てこがらく
とせんじつめ有なくなりさゝ時粉にして
飲ましてよろしべし 泊定編

上々の茶梔子等分水にてせんじ用ひ
てよし 摘玄方

●嗄嗽 ささのこやなり

○嗄初て出る時
生姜黒焼にして白湯にて用てよし 本草衍義

○嗄やまざるハ
生姜をゝ 餳ぢやう 五匁 くつゝ合鍋にて
よく煮て熱き内ニ食てよし 初虞生必効方

○又方
浮石粉にして湯にて飲てよし 肘后方

蜜一盃 香油 生姜汁 ちやうゝ花 ゝ
右等分火にてとろくと煮つめごとく
となりて時々用てよし 雲林神穀

○又方

生姜薄く切焙粉にして糯米に食すべし

癸志

○又方

生姜を湯にて用てよし

嗽やまざるよハ

生姜四拾目湯にて煎じ其湯にて行水

さめてよし

千金方

●瘧

○瘧毎月又ハ日まを發るよハ

生姜四匁汁を絞椀に入一夜外へ出して

夜露にうるをせて其翌日早々に北の方に向

て飲べし其日落ぬハ再飲べし

易簡方

○又方

生姜の絞汁小茶碗に一盃飲てよし

明医雑著

○又方

狗蠅一疋頭と翅とを除て蛹にして丸ず

發日の朝冷酒にて飲てよし

医方大成

○又方

山さゝきの身にて茶碗に水二てに入

いよせんじ用てよし　医宗必讀

○大便血すゝ出て下ばよハ　痢病
塩を紙ゟ包わくなるなど燒てうゑし
て粥ゟいまし食てよし　急救方

○又方
五倍子　のこゝろ時　五分　生又五分ハ黑
燒ゟして已上を水ゟて丸し赤こゝろよハ
温酒ゟてのみ白痢ゟハ水と酒と等分に
合てのみ水のごゝく下るゟハ食の湯ゟて
のむべし　集霊

○赤白下痢ゟハ
葱白粥の中へ入てよく煮てうゑて
よし　食医心鑑

○又方
生姜を皮　艾五分　ゟめごゝくせんど
らしてよし　医統

○赤白下痢又ハ泄瀉或ハ心腹のいたみ痔血

艾葉 生姜 三分醋と水と等分よくに
一ていよりんで用てよ　　医統

○痢病不食をろよハ
山藥 五分 生又五分ハ炒二色ともにつき
ごくこ食れ湯よてのむし　　衛生易簡方

○又方
糯米 半合 生姜のこをり汁少〻入炒粉よ
して白湯よて用てよ　　魯府禁方

○又方
梅干をツ核と捨上々茶をよとこ〻食
醋と湯と等分よ合てのこて　　医統

○又方
上々の煎茶のこてよ
○痢病愈て後不食するよハ
赤小豆煮て食てよ　　孟詵本草

○小兒の痢病よハ
雞子湯よ煮て白こと捨黄をのとろ　　医統

ぢりをりらぐさ生姜のもぐり汁にて用ゆ

二三日茶をのむべし

種杏仙方

●泄瀉　水のごとくしてくるぐるなり

○他國へゆきて水ゝつり或ハ旅の中に腹くだる

ゝハ

鞋の底ゝくるりくるりを水ゝうりさた

てのみてよし

藏器本草

○暴ゝ瀉痢ゝハ　くまの　食ゝ湯ゝてのゝて

百草霜　はのしもなり

○又方

艾もゑ　生姜三分つゝのごとくせんじ

のみてよし

生生編

○夏の中水のごとく腹くだるゝハ

五倍子　はのくろくろ時　粉にして白湯ゝ

て用てよし

余居士選奇方

○小兒腹下を腹くゝ大さなるハ

多くゝ垢の付たる著物を四五寸切て水ゝ

續方全方

て常のごとくせんじ服べし　千金方

●霍乱

○霍乱吐し瀉せざるハ
地漿水　地と二尺あまり切りてその中へ水とへ入るべしうらわら
二三盃のみてよし　千金方

○吐利下利ともにハ
釜の底ハ墨五分竈の口ハ墨五分白湯と
至極熬して酌上くすること百度して
彼二色ハ墨を入てのみてよし　経験方

○又方
屋根裏へ下ること煤五分ばかりわかさ白
湯にてのみてよし　衛生易簡方

○又方
道にて捨こと破草鞋一そく鼻緒の所と二寸
ばかり切捨水にて二三度洗てのち湯にて
せんじのむべし　事海大山

○腹痛て吐し瀉せざるハ
塩湯を多くのみてよし　本草

西村氏蔵書

○又方
塩とわらに炒て布に包肢昔をあらためよ　救急方

○又方
生姜を水にて常々煎用てよ　肘後方

○又方
石灰五分醋にて飲てよ　摘玄方

○吐逆やまざるにハ
糯米粉にして水にて飲べし　医統

○又方
艾を水にて常々煎用てよ　百今医統

○乾嘔やまざるにハ
薤葉水にせんじもちゆべし　千金方

●嘔吐　ふづきわりて吐逆をとるべし

○嘔やまざるにハ
白胡麻を油茶碗に二くハ入一くハいるべし
よくねりてよし　近効方

○又方
生姜弐匁醋茶碗に三盃入一盃に煎用てよ　食医心鑑

○又方

ひねの栗一合生姜のしぼり汁茶碗ヱ二盃水茶碗ヱ三盃入一盃ヱ煎じつめて用べし

心鑑

○又方

陳皮みかんの四分生姜八分水茶碗ヱ二盃入一盃ヱせんじのこしてよし

仲景傷寒論

○乾嘔さらヱハ生姜食てよし

心鑑

○嘔病發て食物通ぜざるハ伏龍肝やけつちの下の方を粉にして食べ湯にてこしくのむべし

百一選方

○又方

芥子の粉酒にて毎一匙づゝ飲べし

千金方

○又方

生姜粥にて煮て食てよし

奥部手集

○又方

昆布五匁よく洗小麥二合水茶碗ヱ三盃入

熟ド小麥ようく煮うる時汁をのむべし又昆布一切口ヨ入て常ヨ昆布ヨ味をのゝこむべし　医統

○又方
鬲年炊米　去年の子ゐるり道明寺　急なる流川の水ヨて粥のゝ煮て上湯を飲へし　医統

○又方
生韮のゝ搾り汁　毎日小茶碗ヨ一ゝいしく
のみてう〜
●呃逆　ちやくりの類聚

○呃逆やまざるよい
席燃を鼻へ入嚏してう　醫方經

○又方
生姜汁背ヨぬりてう　本草

○又方
竹節　竹のまをさうめをけづり捨湯ヨてせんし
うちひて　本草

○又方
柿帶　くしげさのつゝみり
梅干　きつ水茶碗ヨ

一盃入六分よせんじ用る　医統

○又方
川椒の粉醋にて丸白湯にて用てよし　医統
●吞酸　すきおらびめしくとかやうひとり

○醋さゝおらびぬてやまざるよハ
生蒟蒻しらびく食てよし　集簡方

○又方
頭の垢水にてのみてよし　本草
●饋雜　ひるのうくやまひとり

○胸心あしさよハ
醋小茶碗に一盃のみてよし　本草
●氣鬱
○氣の鬱しうるよハ
赤小豆煮て食ハ絶氣を散す　本草

○又方
黒大豆煮て食て中を調氣を下す　本草
○胸冷て氣のぐうるよハ
生姜食てよし　本草

○又方
蜀椒食てよう
本草

○又方
蘿蔔食てよう
種杏仙方

●痞
○うるのうえより
○心腹痞て痛こゝろとするよハ
塩を水にてせんじのべて
梅師方

○卒に腹痞癖でハ又痞よハ
韮のしぼり汁のもてよう
唐書王燾獨行方

○飲食をして腹痞よハ
正しくかこまり引息を腎の下まで
けゝ又粥息を腎の下まで引おすべくく
よ四十息をして愈
病源候論

●皷脹
計足ハつゝのごとく脹だるく
大なるやまのごとく
○腹腫て大なるたゝけバ鼓のごとく鳴よハ
蒜の根皮を去て綿に包みこわつく
炒て大便道へ入冷ハ又易柴度も入て
ら大便通ぜさる病よもかくの

○又方

生姜をあらく炒まわりて綿につつみ大便道へ入れ炙し又ゝてつゝめべし

梅師方

● 水腫　一身しくしくこれら病なり

○五體手足悉腫るゝハ

黑大豆茶碗ゝ一盃水茶碗ゝ五盃酒茶碗ゝ五盃入三盃ゝ煎用てう

千金方

○又方

黑大豆水ゝて煎用てう

苑汪方

○風腫ゝるゝハ

牛房の實を白湯ゝて飲ゝ

聖惠方

○足腫ゝるゝハ

葱のせんじ汁ゝてゝ漬洗て

韋宙獨行方

○卒に陰腫ゝるゝハ

牛の糞黑燒ゝして酒ゝてゝ浸けて乾バ又つけてう

梅師方

●積 ものにくさまりわりていたむより

○胸腹ニ積のうさまりわりて痛ミハ
毎日醋ゆづのとてよし

本草

○又方
昆布を常ニ食てよし

本草

○又方
蜀椒食てよし

本草

○又方
浮石粉にして白湯にて飲てよし

本草

○食物色て積となり痛ミハ
深上塵ちねの下ぢけものひとりより飲てよし

本草

●黄疸 也名黄病

○一身皆黄ニなり小便も黄ニなりちゐハ
生姜にて惣身をするべしいつとゝをなく
黄色退き愈

傷寒捷法

○又方
乱髪 男女のぬけちり黒焼にして そゝて
毎日水にて服べし

時后方

○又方
柳の木せんだのびべし
外臺秘要

○又方
梅樹根粉にして酒よて飲べし
食療本草

○又方
蘿蔔の實粉にして白湯よて飲てよし
古今医統

○又方
生蘿蔔炒粉ゑして弐匁づゝ白湯よて
服てよし
赤水玄珠

●吐血　血をくるり

○吐血やまざるよハ
伏龍肝　竈の下のやけつちの
水よてのろてよし　粉ゑしてもよ
廣利方

○又方
鍋墨　水よてのろてよし
濟急方

○又方
艾　水よてせんじ用べし
●鼻血　鼻血の出るもの
千金方

○鼻より血出て止ざるハ
左よりおゞ左の足と水よりひゞ右より
おゞ右の足をひしてよし　本草

○又方
伏龍肝　くまどの下の土の黄なる泥をとり水にて
のみてよし　廣方

○又方
百草霜　糯米を煮る湯にてのみてよ
ましにとゞまる　劉長春經驗方

○又方
艾水にてせんじのみ或ハ鼻のあなへ
艾を煎汁を入筆の柚にて吹てよ　聖惠方

○又方
五倍子　女のそぐろつゝ弱　鼻のあなへふき
つゝまてよし　衛生易簡方

○又方
生蘿蔔のおろし汁　鼻の孔へふき入
てよし　壽世保元

○又方

蒜つきくだき泥のごとくして厚さ弐分ばかり大さ弐寸四方よして脚のうらにつくる右の鼻孔より血あれば右の脚のうらにつけ左の鼻の孔より血あれば左脚のうらにつけ右方より血あれば右左脚のうらにつけてよし

医統

○又方

糯米を多黄色に炒新汲水にてのむ

医統

○又方

鼻血あるの方れひの小指をこうまして痛かゆくもとぶへし左右ともあるときハ右方の小指ばかりてよし

證治準繩

○又方

白紙を数新汲水に浸し四つに折頭に百會にあて上ばりさすべバ忽止

證治準繩

●下血　大便のあとさきに血の下るなり

○大便のあとさきに血乃たれるハ
百霜草 弐匁 食の湯にて一和和へ
出して夜露にさらし 翌日空心に
服してよし

邵真人経験方

○又方
艾生姜 等分 水にてつよのごとくに
ねりひてよし

千金方

○又方
五倍子 安めくろつくり 食の湯にて
つよくろつくり

のみてよし

全幼心鑑

○又方
黒大豆 炒焦粉にして酒に入ざること
煎大豆を去て酒にて飲てよ

活人心統

○又方
小豆 きゝ粉にして冷まして用
てよし

梅師方

諸血
一身の中何方にても血のおるるとき
●
○惣身の毛の竅より血ぬて止ざるハ

生姜のおろし汁のみてよし　奇疾方

○又方
乱髪　くろのおろし　黒焼よしてつけ又打計　堤法要決

鼻の孔へ吹入てよし

○口鼻耳前陰後陰より一度よ血あるよハ
生蘿蔔のおろし汁　茶碗よ一まへのみてよし　譚治準繩

○一切のよ血よハ
乱髪　くしけより　黒焼にして水よて

のみてよし

小便血　痛なく小便よ血あるより　聖恵方

○小便の後よ血出るよハ
乾柿　こがさてて　黒焼よして食の湯
よてのみてよし　医鏡

○又方
胡麻　弐文　粉にして水茶碗よ二盃入浸て
翌日早朝よ成程熱く暖のみてよし　千金方

○又方

醋茶碗ニ一盃塩五分煎飲てよし　廣利方

○又方

五倍子　女のそくろ　ひらくろ　梅干の肉ヲこゝ合せ酒

よて用てよし　集簡方

汗　春秋冬のわるくもをと時ハあせ少くて汗

○一切の汗ニ用てよし

小麥黄色ニ炒て五分　椒目五分　水茶碗

一盃半入七分ニせんし一夜外へ出し夜露ニ

うるをわるくめあみてよし　救急方

○又方

五倍子　女のそくろ　ひらくろ　津ニて移り頃の中へ

一盃入紙ニてそくしてせ　集驗

○目の覚てあるハ阿汗出るハ

糯米黄色ニ炒粉ニして布袋ニ入汗の出

いろ上をかとくしわべし　道藏經

○盗汗やまさるハ

餓ニ麻しとの粥少し腹をそけ燒

餅きり食て湯水をのまずして卧べ

二三日して治ぬ

●眩暈　めまひ病なり

○眩やうなてらてらくしもるよハ
生姜ゝしぼり汁茶碗ゝ一盃飲てよし　本草

○又方
蟬退　かしらとあし　粉にして
食の湯ゝてのこして　医統

●麻木　ふるへてなやみ　医統

○惣身麻てまのやうなるよハ

芥子の粉醋ゝてとろとろあらぬ　勢生秘覽

○胸ふるへるよハ
忽白と煮て多食てよし　危氏方

○五體しびくく痺るよハ
胡椒一撮　葱白三本細切　塩一撮　小麥粉四五合
酒茶碗ゝ二盃醋茶碗ゝ二盃入銅鍋ゝて
わくわくめて痺る所をひとぬり
汗出て愈一両日風ゝあたるなかれ　医統

●紅　こうらくやまいのこと

○狂乱して わるくよハ
伏龍肝 竈の下の灰の粉 よしてを五水
よてのみてら
千金方

○又方
人の屎 黒燒にして酒にて用べし
千金方

○又方
鐵漿 茶碗に一盃用てよし
医統

○笑て晝夜やまぬに狂よハ
塩をよくわるくやきて河水にて

一度に用べし 痰を吐てら
儒門事親

○一切の狂氣にハ
鼻の下の溝の真中に灸をすれば忽に
正氣になり左に圖わり見合べし
医統

灸穴

癇

俗に云くるつきなり

○癇症にて久しく成しハ愈めなりの事
初て發るにハ兩の大指を二ヶ所一所にて

てくろと二ちの指の船と敵との四所へくろくろ
よ灸すべし 老よ圖わり見合べし 医統

●健忘 物くわれする病ある 山黒の下よ灸すべし

○くろくろ物くわれするハ
石菖蒲の根毎日食てよし 医統

○又方
戊子日 桃枝二寸切て桃の中へ入置て枕ゑ

それで物くわれる法 聖恵方

○又方
七月七日蜘蛛一疋とりて我衣裳の間又ハ
衣裳を入る箱なれ中へ入置て人よくく
とるなかれ次日ぐりの後一切乃事
わくとれず 聖恵方

●驚悸 くちのくるしくおどろく病なり

○常よ物おひえして何と為ても恐しきやうなハ
胡麻油毎日少宛のとてよし 本草

●不寐

○何のゝりもなくさよ夜寐られざるよハ

燈心水にてせんじべし　集簡方

○晝夜ともに寐られざるよハ

新さ布切を火にて焼くわゞり用の上を

ひさわなどで又大豆をわるくしして袋に

入枕にしてねれば其まゝ寐られる

枕の中へ大豆冷れば又入てわるくしべし

二三日如此をすれば愈　肘後方

●邪祟

○一切の邪鬼妖魅野狐のたゞひとにとられ

やまひよハ

桃奴　桃の木の根を落ぶして大くだく

酒にて用てよし　粉にして　医統

○又方

赤ゝ大指二ヶ繩にてくゝり　肌肉四所の角

に灸してよし灸の仕やう　痛　四丁目

圖わり足合をべし

○又方

空ヨ向ひて 冊 如此指ヨて書ヲ画し九龍符ヨいフ是ヲり早速ヲ

種杏仙方

●小便濁 小便の濁ヲ病ヲ

○小便白く濁ヲヨハ

冬瓜の實炒て粉にして空心ヨ白湯ヲ

用てヲ

道藏經方

○腎虚して小便濁ヲヨ

韮の實炒粉ヨして食前ヨ酒ヲてのんて

ヲ

●遺精 寝て居る内ヨ精のりて ヲ

俗ヨいフ

聖恵方

○男女ともヨ夢を見て精汁泄出ヲヨハ

韮の實生ヨて批粒空心ヨ塩湯ヲてのび

藏器本草

○腎虚して夢ヨ精泄ヲヨハ

韮の實弐匁少し炒て粉ヨして食前

ヨ酒ヲてのんてヲ

大平聖恵方

○又方

山藥 ※ 葱白五分 塩少已上三色酒に中よ入れよく煮さる時酒ともに飲てよ 赤水玄珠

●淋病

○熱淋 腹の中よぬつわりて血淋 小便よ血おて渋痛淋病なり 痛なき八尿血なるよ八 赤小豆三分炒粉よして葱一本酒の中よ入煮煎うしのみてよう 修真秘旨

○急淋陰重しるよ八 葱煨杵煎りして膀胱上よ付てよし 外臺

○小便渋痛よ八 葱白皮赤を一寸切て膀の上よをきて七壮灸してよう 經驗方

○石淋よ八 小便の中ち砂のごく白ち物いでるなり 浮石粉ちして水醋等分よ入てひれごくごくもんで用てよう 傳心適用方

○又方 乱髪黒焼よして水よて用てよ 肘後方

○血淋よ八 竹筍 竹の青さ皮をけづり捨て青き所を五度水茶碗よ

二盃入一盃ニ煎空心ニ用てよし　集験方

○老人の淋病ニハ
小麥　拾匁　燈心五分　水茶碗ニ三こい入
ていねいせんじ用てよし　奉親書

●遺尿　小便たれるなり

○寐て居る内ニ小便あるときはさらまハ
白紙を枚其病人の寐る下にしき
そこの白紙ニ小便をやうくわして
日取出し黒焼にして酒にて用てよし　医統

○又方
五倍子　女のそろそろ時　五分　皮五分ハ黒焼
にして已上を粉にして糊にて丸じ食
の湯にて用てよし　嬰童百問

●小便不通　小便通せざる病なり

○小便通ぜざるハ
梁上塵　やれの下桁の
上のつちなり　二撮ほどもちゆ
いそよし　外臺秘要

○又方

濡るる紙に塩をつくこと成程よく焼て少許
小便のあるところへ吹入てよし

普濟方

○又方

葱白一把炒わつくして睛の下を度く

本事方

○小便なくあんらしておそ痛みハ

古き筆の毛の所ばかり黒焼にして水に

てのみてよし

外臺

●大便不通 大便つくもざるなり

○大便通ぜざる心わるさまハ

胡麻米と等分に合粥に煮て食ハ通

じるかり

肘後方

○又方

蜜五両銅鍋にてとろくと炒つめかさ

まりしろ時かきくまるめ尻の穴の内へ入

をくべし大便通ぜんとおもふ出来しる時

の蜜をのくべし

仲景傷寒論

●大小便閉　大便小便共方ともに通ぜざるもの

雄鼠屎　ねずみこのふん　粉よして臍の中へ水

よてつくれば忽通ずるなり　普済方

○又方

塩を酒よてとき臍の中よりの又塩水を

尻の穴の中へ少し吹入又塩水を少しのむ

忽し妙よ通ずるなり　家蔵方

●痔

○痔おこりて痛よハ

胡麻を煎し洗てよし　本草

○又方

五倍子　あぶらかつる角　煎洗てよし　直指方

○痔血出るよハ

小豆を酒よて煮酒を炒つけて乾時粉よ

して酒よてのむべし　肘後方

○又方

葱白湯よてもんで洗てよし　外臺

○又方

鯉を煮て食てよし

食医心鑑

○又方

榧の實つゝよく食てよし

経驗方

脫肛

屎の穴もれぬる痛病多

○脫肛痛甚しきには

梁上塵　やねの下の桁の上の多く鼠屎二色を火にて

焼薫ずべしよし

肘急方

○又方

石灰換く焼紙につゝみ其上に座して

冷れば度々あたゝめてよし

聖惠方

○又方

五倍子　百草霜　等分粉にして

醋にてとき鳥の羽にてぬるべし

普濟方

○痢病にづいて脫肛出るには

塩をあつく炒て紙につゝみそのうへに座して

よし

肘後方

虫症　ゆ腹のるもの

○虫腹を痛め顔の色白く唇赤く口より水を吐まハ
艾三匁常ゝごとく煎に用てよし　肘後方

○又方
小麥の粉白湯よてのみそよし　本草

○又方
蜀椒酒よてのみてよし　本草

○又方
薤乃實酒よてのみてよし　本草

○又方
塩湯のみてよし

●頭痛　つゞりの痛事

○一切の頭痛ま
生蕪菁のおろし汁少しづゝ鼻ハ孔へ吹
へてよし右ぢり痛まハ右の鼻へ吹入左痛
まハ左の鼻へ吹入左右とも痛まハ左右
ハ鼻の孔へ吹入てよし　加宣方

○又方
大豆よく炒て酒ま漬又大豆を湯煮して

右方等分よきもあり毎日七日ばかり

千金方

問くひてよし

○飲酒頭痛するよハ蛇とけづり搭竹筯俗の結きさ蛇正をかうらう五反雞子そう

千金方

つ○ハ〳〵くせんに用てよし

○腦痛するハ

桃の葉を多く集て枕をしてよし

醫齊閒覽

●鬚髮のけのやまひ

○白髮抜て黑くせんとおもふ

生姜の皮拾女胡麻油にて煎況の如しそ

白髮ぬけくろあらくへつく毎し三日以後

黑くなる

蘇頌圖經本草

○髮を黑くせんとおもふ

油と醋と等分に合黑大豆を煮てうく

煮る時黑大豆を取出し油をとろく

もるやうに練りつめ髮につくれば一夜月

のうちに髮黑くなる

千金方

○又方

乱髪 敷地のぬけらの洗て胡麻の油よて
せんじつめ乾時粉にして油よて練りて
髪よつられて髪黒くなる　聖恵方

○又方
槐子 そんちゃの実を常に服ハ髪鬢白
髪なく年老ても黒くもし　梁書

●面
○面上よ出来る諸瘡よハ
胡麻嚙てつけて　外臺

○又方
艾 式を醋よてせんじ詰め汁を貼て
よし　御藝院方

○面搔やぶり疵つさるよハ
生姜のしぼり汁まて白粉を擦つけて
よし　医学入門

○面よ疣目のおきるよハ
艾よて三壯灸してよし　聖恵方

○腮腫るよハ

赤小豆粉にして醋にて塗てよし　赤水玄珠

耳

○聤耳汁おるよハ
伏龍肝をまどの下の灰の綿に包て耳へ入て
日に三度入てよし　聖恵方

○耳腫痛によハ
五倍子を冷水にてとろねるべし
りこれをよハ粉にしてつけてよし　海上名方

○聤耳膿出るよハ
五倍子、女のそぐろ角、耳の中へふきこむ
よし　普濟方

○又方
故綿黒焼にして綿にたく分耳の中へ
入てよし　聖恵方

○耳鳴或ハ卒に痛によハ
塩わらにめしを枕とし冷れば
わらにめてよし　肘後方

○耳痛るハ
砥にて小刀を磨磨のごとく黒くなりたる鉄
氣の水少耳の中へ入てよし　赤水丸珠

○一切の虫耳の中へ入るよハ
胡麻油少し耳の中へ入てよし　医統

●鼻

○風氣にて鼻塞るよハ
梁上塵　上の下桁の上の塵の中へ入られてよし　普済方

○又方
釜の底の墨五分水にて飲てよし　普済方

○鼻の中より小指のごとくなる物出来て痛るよハ
釜の底の墨つけてよし　千金方

○鼻赤くなりたるよハ
常に塩水にて洗てよし　直指方

○何の事もなくて鼻柱痛るよハ
琉黄　末のまま粉にして冷水にて
ときつけてよし　澄寮方

●口舌　口舌の癰なり

○口の中一切の瘡腫物よハ
五倍子　女のちぐさ　つくり　をろがそよ　麗氏傷寒論

○口の中悉爛て痛よハ
生蘿蔔　ちぐり汁　ましてうひく　口嗽て
うし　瀬湖集簡方

○又方
生姜のちぐり汁まして口嗽てうし　又少
のみてうし　本草

○舌うり血出るよハ
小豆粉にて水にて煎て飲てうし　時後方

○卒よ舌腫て痛よハ
釜の下の墨酒まして　千金方

○小兒口瘡よハ
硫黄　つけまの水まして　袁方　ぬの内

又袁方の足のうよ塗てうし　危氏得効方

●牙齒

○齒齦うり血出るよハ

酸漿霜ゝりつのてうゝ

集簡方

○又方

五倍子 ゝのくろつゝ時黒焼にしてけれど

ゝらまちやむ

衛生易簡方

○牙痛よハ

壁土粉にして塩等分ゝ入ゝく炒右痛よハ右

の鼻の中へ吹入左痛よ左れ鼻の中へさ

入てよし

普濟方

○又方

胡麻を水ゝてゝるものごゝくせんしゝはよ

含嗽してよし

肘後方

○又方

黒豆一撮葱白三本艾一握川椒四十粒水茶

碗ゝ二盃入一盃ゝ煎嗽嗽してよし

医統

○蟲ゝひ齒痛よハ

艾を火ゝて燒其煙を鼻の中へ入口ゝ

其煙を吐出してよし

普濟方

○又方

鼠粘子炒水すて熨じ かゝみ嚙して
よし

延年方

○又方
石灰砂糖等分蟲齒の孔の中へ入て
よし

普濟方

○又方
石菖蒲の根咬爛して蟲齒の孔の中へ
入てよし

医統

○又方

絲瓜黒燒して粉にして擦付て
よし

医統

○牙齒ぐらみ或はうさるるハ
黒大豆酒にてせんじくちをゆく
みてよし

周密清然藏拾

○又方
赤小豆粉にして齒をもりあらゝ又ハ
鼻の中へ吹入てもよし

家寶方

○唇列衣いくむしるハ

青虫 [illegible] 茅屋のうらにもあり

てよし

医学入要

●眼目 目のやまひなり

○眼暴れ赤腫痛まハ

百年已上の古銭まて生姜をこそげて古

銭の耳ゝ汁をつけて眼ゝをそりつけてハ

私云百年以上の古銭とハ大方なり

[illegible]

宗奭本草

○又方

豆腐湯煮して眼の上にのせ置てよし

本草

○眼腫火のごとくいたむまハ

焼酒ゝをあらゝへてよし

本草

○又方

黒大豆煮てゆくろ入眼胞のうへかであ

らゝてよし

本草

○眼何とすく癰まハ

布切を湯に浸わらゝめ眼胞の上をそゝわさ

らゝあ又大豆を蒸あらゝしてゆくあらゝまハれ

枕とゝしてよし

聖恵方

○涙多く出るよハ
塩と眼をとりつけ冷水すて洗てよ　范汪方

○眼赤く涙多く出るよハ
女の乳をとりつけてよ　本草

○眼の中に瞖出来るよハ
塩ととりつけてよ　直指方

○目睛痛るよハ
毛をぬき捨て血を出て人の身をわる
風ととりつけてよ　本草

○小兒目の中に瞖出るよハ
燈心に塩を付て目をとりあらためよ　活幼口議

○雀目によハ
地膚子すりり煎用を洗てよ　本草

○又方
生姜のしぼり汁すて洗てよ　医学六要

○又方
焼酒にてあらひてよ　医学六要

●咽喉のどやまひよ

○咽喉一切の痛ハ
胡麻炒粉にして白湯にて飲べし　三因方

○喉腫痛食のとおりわるくさはり
蓖杵ぐさ項上につけべし　医統

○喉痺ハ
足の三里に灸すべし　三里ハひざのさらよりの寸下にあり　類経

○又方
醋のみべし

●癭瘤　とぶのうり　萬病回春

○一切の癭瘤に用ゐし
牛皮油鞋底　黒焼にして胡麻油
にてとくべし　集玄方

○又方
上ぞれ昆布よくあらひ塩氣のなくなるまで
して醋につけをき口よりくゝ餡ぐらい
てハ又含んでしべし　医林集要

●腹痛

○卒に脇痛ハ

柱のなれ石の上のわらびやうたを五をあ
まてのみてよし

藏器本草

○又方
白砂糖を茶酒碗に二盃入一盃よりへ
のこしてよし

子母秘録

○又方
塩湯多くのみてよし

吉人医統

○又方
胡椒わらさ酒まてのみてよし

道藏経

食療本草

○右まてし尤まてし腸腹痛によハ
黒大豆弐合炒て酒茶碗に二盃入一盃に
せんじ用てよし

時后方

○又方
葱まてし艾まてし韮まてし菜まてし
湯まてわらくわらく痛ふと熱煖てよ

医統

腰痛うれいなり

○腰痛て起居しにくしよハ

腸痛 腸腹痛

胡麻香色ヨ炒粉ヲシテ温酒或ハ生姜
湯ヲシテノムベシ　千金方

○又方
黒大豆五合水ヲシテ煮ワクナルヲ時代衣
ヨ入扁ヲヨクヽ熨ベシ　延年秘録

○腰背腫シ痛ヨハ
芥子粉酒ヲシテヌリ貼ベシ　摘玄方

○何トモナキ腰痛ヨハ
香油　胡麻ノ油ヲ少シ飲ベシ　南史

○懐妊ノ女腰痛ヨハ
大豆酒ヲシテ煮テ空心ヨノムベシ　心鑑

●疝氣

○一切ノ疝氣ヨ
塩ヲ多ク炒縮ヨツヽミ痛ヲ
熨ベシ　玉機微義

○又方
葱白一握泥ノゴトク拌ヌリ豚ノウヘヨ
ヲキテ其上ヨ灸ベシ　玉機微義

○疝氣發ひて心腹腰痛よハ
胡桃黑燒にして酒にてのむべし　本草

○疝氣腰痛よハ
雞子の黃を白湯にまぜて飲べし　本草

○又方
赤小豆をんどのみてうゑ煮て食べし
べし

○常ゑ疝氣あるゑ人ゑ會て陰囊へうちゑみ
痛みるぐるしく死しするよハ　本草

竹節　竹の節をとりて武ゑ水にてせんじ
のみてよし　医学入門

○小兒の疝氣ゑハ
胡桃をんどのみてうゑ　本草

婦人門

●經閉　月水の通ぜざるゑうゑ

○經水通ぜずして二三箇月ゑありても通ぜざるよハ
牛房を細ゑ刻てむし袋ゑ入酒れ中に五日

浸至毎日空心に酒ぶりのむべし　普濟方

○經水二三年も通ぜず腰股痛寒熱往來するに
芥子の粉弐匁熱酒にて食前にのむべし　仁存方

血崩　月水にかまびすしく通じて
○經水卒にかまびすしく通じてやまざるに
乱髪　綿等分黒焼にして百草
霜等分に合わせてうるの酒にて飲べし　本草

○又方

椒目酒　そのみをよう
帶下　ちりぬぐうに

證治準繩

○赤白帶下によハ
大豆酒にてえんじのみそう　心鏡

○又方
椒目粉にして酒にてのみそう　本草

○又方
糯米蜀椒等分粉にして糊に醋をまぜて
丸にしてのむべし　本草

浸至毎日空心に酒ぶりのむべし　普濟方

○経水二三年も通ぜず腰股痛寒熱往来するに

芥子の粉弐匁熱酒にて食前にのむべし　仁存方

血崩　月水にかまざるもあり

○経水卒にとびてしきりに通じてやまざるに

乱髪　綿等分黒焼にして百草

霜等分に合わせうるる酒にて飲べし　本草

○又方

椒目酒　そのみを

帯下　ちりぢりもの

○赤白帯下に

大豆酒にてえんどのみそう　心鏡

○又方

椒目粉にして酒にてのみそう　本草

○又方

糯米蜀椒等分粉にして糊に醋をまぜて

丸にしてのむべし　本草

証治準繩

○又方
蕎麥粉雞子清にて丸じて五十粒づ
白湯にて用てよし　種杏仙方

○又方
竹茹　竹のまを皮をこそげとり少し火にて
うとうとあぶりて粉にして一度に三匁づつ白湯にて
のむべし　普濟方

産前

○懷妊の内に風引いたるハ
傷寒類要

○懷妊の内に下痢するハ
白湯にてのむべし

○懷妊の内何にても腹痛ハ
塩一撮赤く燒酒にて飲てよし　産寶

○懷妊の内腰痛ハ
艾酒にてせんじのむべし　子母秘錄

○懷妊の内に下血やまざるハ
艾酒にてせんじのむべし　時後方

○懷妊の内經水通じるハ
伏龍肝　かまどの下の灰のとれる
白湯にてのむべし

赤小豆粉にして酒にてそを完飲てよ　千金方

○胎内の子動て胸までつさ上げ痛まハ
艾醋にてせんじのみてよ　子母秘録

○又方
梁上塵　やねの下れ桁の上の　竈突墨　釜ぞえ
のやりなり　木の墨なり　右二色等分酒にて飲てよ　千金方

○胎内の子哭まハ
鼠穴土一掬水にてのみてよ　種春仙方

其妊婦腰をひめて物を給ぶ　うまれ
ぢ忽止　丹臺玉案

○胎内の子動て下血をするまハ
葱白十本水にて濃せんじてのむべし
子胎内にて死られど自出ずまたぶれど
何のくるしもなくまづまち一度のみて効
なくハ再のむべし　深師方

○六月七月の比胎動て痛ものいたさまハ
葱白水にてせんじのみてよ　楊氏産乳

○又方
鯉と煮て食てよし
血下るまハ
種香仙方

○子癇として血ハ
五倍子 女の子ぐろつかれとき
てよし 式を酒にてのむ
朱氏集験方

○懐妊八九箇月にして脇の内動てみなれんと
ちうよハ
桑上塵 釜底墨 釜底の
酒にてのみてよし
本草

○胎ちうとく一人にして二人もありちうあるとき
懐妊して又胎をうして胸心あるときハ
赤小豆を丸粉にして酒にて用ゐ
千金方

○横産或ハ逆産ハ生れんとするハ
伏龍肝 まどの形れ炭のトの
酒にてとき毎れ脇の中につけそば
救急方

○逆子よりまれんとするハ
手の中指ハ釜のうら墨をあつくつけて
せなかの足のうらにぬれば平産す
千金方

○横産逆産生れんとするハ
梁上塵 ねの下棚上の
つゝく平産を
子母秘録

○逆産生れんとするハ
塩を臍に付て母の脚又生るゝ子の足の
うらに貼て仍て搔出す
千金方

○又方
其父の名を生るゝ子の足乃うらに書て
平産す
種杏仙方

○子腹中にて死するハ
伏龍肝 竈の底の土
三度酒にて飲べし
十全博効方

○又方
大豆醋にて煎じのむべし
産乳方

○子生れゝ時ハ
赤小豆七粒生るその日催生薬にて処置
産寶

産後

○胞 ありざるニハ

家の中心柱のなかの石ずえの上にやうやう
なりたる雞子の清をとりてのむべし

本草

○又方

其産婦の三布井戸上に引潔べきものもあり

千金方

○又方

産婦の着て居る衣物を竈上にうるんで用ふべし

千金方

○又方

大豆酒にてせんじのむべし

産書

○又方

男の子を産らんとハ赤小豆七粒生にてのみ
女の子産らんとハ赤小豆廿粒生にてのみ
むべしとのまりろ

救急方

○又方

水茶碗に二盃醋茶碗に半分入て産婦の
顔へふきかけてよろし

聖惠方

○産後血あがりらんとハ
伏龍肝 やけたるの灰のなかの
をよく粉にして

酒にてのみてよし

救急方

○血ながれ止まるには

黒漆にて塗たる物を何にても火にて焼て

産婦の鼻の中へ煙を入れるべし

綱目

○産後古血おりざるには

艾葉生姜水にてよくにこれを煎じ

用てよし

孟詵食療本草

○産して後産門のしまり閉ざるには

石灰をもゝ黄色に熬常のごとくせんじて

其湯氣にそしてよし

時後方

乳病　ちのやまひなり

○乳たらざるには

赤小豆水にせんじてその汁又其小豆をも

食てよし

産書

○又方

胡麻炒塩少し入れ五七日食へば乳乃出る

唐氏

○妬乳初てはりて癰になるには

醋にて梁上塵やくもの巣のやうなるをとりさて乳
にぬりてよし　千金方

○乳の上の腫物にハ
胡麻炒焦し粉にして燈油にてとき
つけ　本草

○乳癰にハ
雄鼠屎方ふくろ蝉のちんぬきなり七つ粉にして酒にて
のむべし　汗出てよし　壽域方

○又方
葱白切爛て熱　帛包て乳の上をよくぐ
爛てよし　種杏仙方

●前陰　小便道の病
○女の前ちくちくと痒或ハつぶくと汗ばのやう
なる物出来るにハ
胡麻口にて嚼らかし付てよし　肘后方

○女の前陰或ハこまかなる瘡出来るにハ
硫黄　つぼのもくさくさるなり　粉にしてうけて
乾て付べきにハ唾にて付てよし　肘後方

○女の前ちりゝ痒ゝハ
蒜水にてせんじ其せんじ物にてそゝぐ
べしわるひてよし

医統

○女男ゝ會陰ゝ前より血出るゝハ
五倍子 ちのくぐり つゝりてよし

熊氏

○女の前廣て中冷るゝハ
硫黄つゝ杉の木にてせんじ洗てよし

心傳方

小兒門

● 初生

○小兒生れ落る時胎毒を下をゝハ
胡麻生にてよく爛り絹につゝみて兒の
口に入乳のごとく吸しめれば胎毒下りて
よし

外臺

● 不乳

○小兒生れて乳をのまざるゝハ
葱白一寸四ツに刻乳をかしへくさんと

其乳と胸を〆

● 不尿　生れて小便さらざるよハ

○小兒生れ出て尿せざるよハ
葱白一寸四ツに刻て乳を少し入れ〆て其
乳とりるべし

全幼心鑑

● 大小便不通

○生れて大小便せざるよハ
婦人口とく洗て其生れ出し表の上に
とあり足のうらと吸べし

幼幼新書

● 撮口　口と閉常聲出さるなり

○小兒生れて七夜の中に啼聲出ず唇青く乳どのみ
なるよハ
塩と臍の中に入其上に灸すべし

子母秘錄

● 臍風　臍より風引て撮口と似たる病なり

○臍より風引て乳とのみなるよハ
艾黒焼かして臍の中へ二ツに入紙にそな
へてとく灸べし

集簡方

● 臍瘡　臍より汁出るなり

○小兒臍より汁出或ハ膿痛るハ
伏龍肝　かまどの下の灰を粉にしてほりて
ぬる　聖惠方

●口瘡　小兒の口中ただれやまひ有

○鵝口舌一面に白く或ハ舌の下に少き舌の様なる
物出来るハ
赤小豆粉ゆにて醋にてとき塗べし　普濟方

○鵞口一面に出来て舌白くるハ
燕脂　女の口にてねりてぬる　集簡方

○口中に細なる瘡出来るハ
釜下黑つけてぬる　普濟方

○舌の下に又舌のごとくなる物出来るハ
伏龍肝　かまどの下の灰の下の　酒にてとき
てぬる　千金方

●軟癤　なつけのるもの

○暑き時小兒の頭にあせ出来るハ
胡麻炒焦しあつきにて嚼爛して
つけてぬる　譚氏小兒方

●丹毒　そのもの

○小兒丹毒一身いづこにても春霞のごとくひろく赤くなるハ　千金方

大豆濃煎して其汁をもつてぬるべし

○又方

雞子の清にて赤小豆の粉をもつてハ　小品方

○丹毒頭より赤くおこるハ

葱をもつてその汁をもつてつけて　唐仲舉方

○丹毒いづくよりもとも赤くおこるハ

醋にて石灰とともにつけてよし　摘玄方

○又方

伏龍肝　かまどの下の灰　粉にして新汲水にてとくつけてよし　肘後方

●夜啼

○小兒何のゆへもなくに毎夜四ツ時より極て啼ハ

燈花をとりてこなして乳にまぜて小兒に

口へ入べし

○又方

五倍子　女のくろてかみ　つくりうす　唾にてこねて小兒の臍へつくべし

楊起簡便方

●盤腸　小兒寒氣わらに腹と痛身と曲て啼病わり

○小兒臍を曲て多く啼き腹痛るハ

葱わつく炒つるとぐさき臍乃上へ厚くのせくべし　ちづるらるよ尿出て痛止

湯氏嬰孩宝鑑

嬰童百問

●語遲　ものいぶさきさり

○小兒四五歳までものいハざるハ

赤小豆粉にして酒にてとき舌の下へ度くつけてうつ

千金方

●驚風

○小兒物に驚ひくくとしてよハ

乱髪　男女のくれなゐ　黒焼にして酒にてのませてうつ

千金方

○又方

雞子をりつぶしのまゝてう　本草

○驚風遍身黑くなるよハ
赤土醋にて点わらせわつく炒給よ包惣身
を足の方へ熨してう　小兒秘訣

●痒

○小兒乃痒症一切の良物を間とをくらさゝり
大小便水のごとく泄氣ぶとうなるよハ
艾五分水茶碗に二盃入半分に煎用べし　備急方

●痘

○疱瘡いまゝゝとゝさうすよ
十二月に梅の花をとりて陰干にして蜜にて
和ゝ酒にそのまゝとれバ疱瘡とゝ　種子仙方

外科門

●癰

○背にゝ打うつ熱して痛み何となくむりさ
時紙に投ゝ入そめ彼かわく所に紙付
てとるべし一番に乾瓜これでるかう癰の

口のなかを和らかに其所の丈まで百壯ほどの灸をすべし
痛者は痛止痛ざるは痛あて多は散てうしに
もしちしずして口わらそも内攻の患なく
愈やむ〜

李絳兵部手集

○続ける口出来て腫るるは
黒大豆生まま粉にして水にとき付べし

本草

○又方
赤小豆粉にして水にとき物にぬるべし

小品方

○又方
伏龍肝 竈の下の灰乃下の
やけつちなり
蒜等分に合て爛
して泥のごとくにして乾かしけるべし

外臺

○又方
米の粉四分 葱白きをひとつにして黒くなる
まで炒て醋をいれてつくべし 癰疔をのぞく

外科精義

一切の腫物腫て硬く無頭者は先付ては
○癰疔其外一切の腫物口愈ぬ濃出るまは
胡麻黒くなるまで炒粉にして付てよし

千金方

○疔ハ頭面手足ヨリ生ジテ紫色ニシテ泡ノごとく
頭ハひろくして丁蓋のごとくしてすべて先此藥を付
てよし
乱髪　このかたりり　鼠尿等分黒焼ありて
針ヲもて腫物の口をおしわけ右の藥を吹
へてよし

聖惠方

○又方
門のかれ樞の下の土取来りて人ヨリもらひ

蒜ヲもてをりつけてよし

魯府禁方

●便毒　よこねの多なり

○便毒腫痛ヨハ
五倍子　あぶらにてあげて上鍋の中へ入醋ヲもてこと〻
ゆるくと煎つめどろくとなりしころ時或ハ布にて
うる貼てつくべし　越ハ方くにぬべてよし

本草

●下疳　陰茎のやまひなり

○前陰たゞれ或ハ瘡出来るヨハ
乱髪　このかたり　黒焼ありて付べし

心鑑

○又方

五倍子 女のくみてゝ煎うゝ 黒焼にして付てよし 種香仙方

●臙瘡 こぐさきのゆう

○臙瘡汁ぬるよハ

塩をとりつけてよし 永類方

○又方

五倍子 女のくみてゝ煎うゝをとりつけてよし 種香仙方

○臙瘡をゝく愈ざるよハ

杉木黒焼にして胡麻油にてとき付てよし 救急方

●亦瘡 ひそんぐさのゆう

○亦瘡手うゝく惣身ゝ出るよハ

ゆの葉黒焼にして雞子清にてゝよし 楊氏産乳方

○亦瘡ゝ来て日数ゝるよハ

塩を唾にてつけてよし 千金方

●癜風 まだらのゆう

○癜風白くても赤くても此方を用ゆべし

生姜ゝ出るゝり汁と茄帶にてとりつけて妙

日ゝ〻ゝして愈る 医統

○又方

小麥黒焼よしてすりつけたらう　医学正傳

○又方

布切と板の上よ四方を針して打付硫黄と
つゝ木のちさきらうり。粉よして雞子清まぜらして波
布切よりつけ布切縮ざるやうにして乾付
ときは瘢風の上を度くことよし　医統

○又方

硫黄つゝ木のちさきらうり粉まして生姜汁
ばり汁まぜつけらう　廣房機要

●厲風　癩病ゆ倍よ　ぶんぶのらうり

○癩病爛て膿り汁おろよい
五倍子　嚏まぜこねて貼　普濟方

○又方

生の竹の筒十よ黒大豆と一盃つゝ又生の
竹筒よ乱髪　一ぶいとめて稿火
まぜつけて生竹らう汁あらう其汁と盃

よりけをさて名付れおこて瘡の上につくべし

一切の腫物よをこうし

●諸瘡 惣じて瘡の類もろくの藥とゝのめ記べし

○惡瘡久しく愈ざるよハ

家三軒の椀の洗汁をあつめ塩少し入て

其瘡を洗てうし

簡要濟衆

○又方

石灰雞子清をそこねてうくわゞ粉にして生姜のしぼり汁をそ付てうし

救急方

○面に出来しろ瘡よハ

柳の木塩少し入もえゝ洗てうし

李樓所方

○一切の惡瘡又ハ疥瘡よゝ

燈盞の油ぬりてうし

本草

○小兒の脛瘡よハ

綿 木綿 唐綿 黒焼にしてつけよ

傳氏活嬰方

○小兒の頭瘡よハ

皮鞋底 ろくさの皮 洗さゝめ煮爛てうし

聖惠方

○又方
黒大豆をくゆして粉にしてみそとともにくゝ
釜し
普濟方

○漆瘡よハ
磨刀石上泥形なりてゝ
医林集要

○又方
韮葉をもつてゝ
医林集要

○又方
蜀椒のせんじ汁にて洗てゝ
医林集要

○又方
杉の木せんじ洗てゝ
衛生易簡方

○漆よまけよ三人漆よまけぬ方
川椒のせんじ汁と面手脚などにぬりてゝけ
ば漆いゝしてもまけず
物類相感志

○白屑かゝ出来よハ
藜蘆せんじ汁にて髪を洗髪乾て後
藜蘆の粉を髪の根へぬりけてよ
医学入門

○臭瘡よハ

葱の白汁にてあらひ乾し胡麻油つけてよし

外科正宗

○疣瘡よハ

初より出来るに灸をすれば皆愈る

医学入門

○瘭疽おりて指痛よハ

伏龍肝 かけつるあとの灰の上より 竈突墨 竈屋塵 三色合て濃せんし洗て

瘍科準繩

○天蛇頭よハ

雞子に鹽と酢汁をまぜつけてよし

瘍科準繩

○乾癬よハ

巴豆炭火にてわづり油とりあしてあとつけ

瘍科準繩

○又方

馬齒莧すりつけてよし

瘍科準繩

○又方

梅干 蒜 梁上塵 鹽 右等分

醋に一夜浸つけてよし

瘍科準繩

○又方

日中に日向へあて乾齋の面を日よわてその日蔭の地又三壯灸をべし

瘍科準繩

○痔瘡又ハ

滑石五分 菉豆粉四分 ともこさつけて

瘍科準繩

○嵌甲疽又ハ 足袋ハつまりてわるのそれなり

陳皮こくの皮なり 濃煎で洗てよし

医学入門

○又方

梅子の肉をもつけてよし

○一身又猫の目のごとくなり瘡おもて膿血多く痛

瘍科準繩

痒又ハ

雞葱蕗を食てよし

夏氏益寿要方

●扶瘡 人ゝたれ又ハ竹刀の類を敷を

○人又扶瘡ゝ痛ハ

伏龍肝 かまどの中の灰の下の粉にして油まぜ

ともこねりてよし

千金方

○又方
胡麻油あつくしてしたし鐘よ一盃のそそぎ　吹劍續錄

○又方
五倍子　せのそろつく雜つくり醋にてときうるそそぎ　衛生易簡方

○又方
大豆粉あつくしてしたし　千金方

○高所より落或ハ骨を打折痛ハ
大豆せんしのかそそぎ　千金方

○一切の打身皮破さる者ハ
生蘿蔔汁つけてしたし　邵氏方

○一切の打身ハ
生姜のしぼり汁酒等分に合温飲の粉
をこして貼てしたし　易簡方

○又方
石灰胡麻油にてつけてしたし　集簡方

○又方
胡桃の肉酒にてもみ拌ぐそそぎ　医統

○又方

葱白杵爛わつくいりて其痛むうへ盈て
わくめてよう　葱白冷バさしくゆへつけ
てよう　正體類要

●金瘡

○金瘡血あてやまざるよハ
釜臍墨をふりつけてよう　開寶本草

○又方
香爐灰ふりつけてよう　本草

○又方
玉信子をのこぎりくつくつ　ふりつけてよう　諸藥家方

○又方
葱わつくわぶり汁をぬりてよう　梅師方

○又方
生姜嚙つけてよう　扶壽方

○又方
石灰つけてよう　白壁をこそげつけてよし　財石方

○金瘡血多くハ出てよう　身冷まハ死を早く
塩を炒て三撮酒ヲ用てよう　梅師方

●湯火傷　やけどのまつり

○火そも湯にそを人乃身よかるをやけどをやらふハ
井戸ゐ底の泥わりてら　證類本草

○又方
胡麻生ゐそ嚼つけてら　外臺

○又方
醋ゐて洗てら　北夢鎖言

○又方
生蘿蔔のしぼり汁つけてら　聖濟總錄

○又方
石灰水ゐてとさつく　肘后方

○又方
灰水ゐてどさつけてら　医統

○火ゐて燒しるにハ
酒ゐて洗ひ其あと塩をつけそはし　医学六要

○焮さ酒かりて痛ゐハ
糯米黒く炒粉にしてつけてら　医学六要

○灸瘡　きうのいぼらくるまり

伏龍肝 竈の内の灰の水にてたき煎てよ　千金方

○又方

春ハ柳の白き花をつけ夏ハ竹の中の紙をつけ
秋ハ綿をつけ冬ハ兎乃毛をつけてよ　資生經

● 虫獸傷

○蛇足に繞て解ざるハ
熱湯にてあらてよ　千金方

○又方

小便にてあらてよ　肘后方

○毒蛇のさしたるハ
塩嚼てぬり其上に艾にて三壯灸して又塩
をぬりてよ　徐伯玉方

○又方

艾にて灸してよ　集簡方

○又方

生姜のしぼり汁につけよ　本草

○蛇のさしたるわしに瘡となりたるハ
わつさ酒にて度く洗てよ　廣利方

○蜘蛛ひて痛其外一切の虫のさしるるよハ
胡麻のとをらしつけてそう　経験後方

○蜘蛛のさしるるハ
生姜の汁つけてそう　本草

○蜈蚣さしるるハ
塩をとりつけてそう　或塩湯すてあらひ　梅師方

○又方
蝸牛をとりつけてそう　錦囊秘録

○又方
雞子清ぬりてそう　瘍科準繩

○蠍蛸人をさしるるハ
石灰醋すてとをつる　聖恵方

○蜂のさしるるハ
塩をとりつけてそう　千金方

○又方
小便すて洗てそう　肘后方

○又方

其さうれを湯に浸してうらうら
湯冷バ度ク〻ヘて浸とべし　大平御覽

○刺毛虫くるハ
伏龍肝　黒やけの灰の
水にてとけて
ら

傷寒準繩

○蚯蚓さして毒内に入肩髮ぬけ癩病のごと
なるハ
石灰のみて洗てら

經驗方

○小兒蚯蚓に小便
うけて前陰腫るハ

本草

火吹竹にて吹魚し

○田にゝ行者蛭にしぬ方
油に塩に入て足にぬれバ蛭うてさず

病源候論

○夏の夜蚊の無きまじない
端午日午時儀方の二字を紙に書て柱毎に
張て蚊ず

種杏仙方

○蠅子に無きまじない
端午日午時白の字を紙に書て柱の上の方四所
に張て蠅子ずし

種杏仙方

○猫の咬るるよハ
雄鼠屎 右方ハ黒焼にして油にてぬる
てうし

壽域方

○鼠の咬るるよハ
猫の屎にてしてうし

本草

○犬の咬るるよハ
雄鼠屎 右方ハ黒焼にして油にてぬる
てうし

梅師方

○又方

犬の咬るるるハ三壯灸してうし

日經素問

●骨鯁 魚の骨又ハ竹のこなど咽よりるるるるる

○魚鳥の骨咽よりるるるよハ
五倍子 かのこくろて能つくるる 細茶 引茶 等分咽よ
入るれば忽ようし

口齒類要

○又方
水茶碗よ一盃酌て左の眼をそゝるを見
るり左れ眼をそゝるれ中へ龍という字を書
入れてのむ 小兒よ骨たるる

よハ傍の人前乃ごとくしてあを小兒よの
ませてよし　医統

○又方
餳糖地さくらそさ一塊のそよし　陳氏方

○又方
醋一ちいのみそよし　丹溪方

○又方
韮の白少く切針まて糸を通し針をぬさ
て糸とよく持韮を骨乃さらさらまで
のこしみて糸を持てそろくしぬき出せ
韮よ骨ならしてあく　古今秘験方

○又方
犬の涎をうしてのみてよし　萬病回春

○又方
別の魚の骨一ケを其骨さらさら人の髪に
挿て入よきくねばさろぬさろ　種杏仙方

○髪のちら咽喉よさらさらよハ
古き木櫛黒焼にして酒そのそよし　斗門方

○又方

自己の髪黒焼にして清酒にてのみて

よし

延齡至寶方

○錢を呑むよハ

炭粉にして白湯にてのみてよし

口齒類要

○金銀をのむよハ

琉黃 石灰等分酒にてのむ

よし

孫用和秘宝方

○又方

艾水にてもんじのびべし

錢相公餘中方

○小兒針をのみたるよハ

黑砂糖丸し用ひてよし

濟世全書

● 五絶

縊て死るもの水に溺て死るもの毒にて死るもの高より落て死るもの
刃にて死るもの五色の死死るものをハたらべし

○自縊死する者あるバ除よ繩をゆるめ上下に撫
をさせ一人ハ女の足よ縊者れ女の肩をさすへ
てよりて力一ぱいの髮を引べし

髮を引べし

帳指入て引べし又一人ハ脇の上とさすりべし又一人ハ臂と
足とをのべさり屈さりすべし半時ばかり如此とし
ハ息出るなり息出て後又半時ばかり前のごとし
て後粥清をすこし用ゆべし人大勢有て
バ右乃外ゟ又壱人して病人の耳を筆軸
をもて一度ゟ吹至し猶以て如此して八活ざる
者かし朝縊て暮ゟ見付ゟハ死切身冷て
活ざる夜中に縊て明朝見付ゟ活ざる

食氣要畧

○又方

梁上塵 ねの月物の上乃豆の大さゆど筆乃軸ゟ
入れ同じやうに四ツゝらへて四人して病人
の鼻ゟ孔ゟの耳ハ左ゟ宛さし入四人息をと
ゝ一度ゟ力一ぱい吹入る即活ゝ外臺

○又方

葱の長さ六七寸病人の耳鼻ハさし入る
血少し出て息出る

本草

○魘死者ゟバ三づゝよりて又ハ風呂敷乃
やうなる物ゟて病人の口鼻ゟ息れ出

ぬやうにして至べし扨病人の眼開たらハあるゝ
小便一ちいロ小入度〳〵暫あつて正氣よかる

○又方

伏龍肝下の方の灰粉にして式匁ばかり鼻孔
中へ吹入てうし

千金方

○鬼魘死ハ喚活べし其病人の脚跟を力一ちい
ロあて咬べし又其病人の面へ唾を吐かべし
初うり燈あるゝバ燈を至度〳〵うし初うり
燈をすさくるゝ故ハ燈をとも

とも至るゝず

○又方

梁上塵下の方の梁の上の塵鼻の中へ吹入べし

瑣碎錄

○又方

温酒面へうゝれバ活る

肘後方

○人晝夜〳〵とに傾の故もるく死入るゝよハ葱七
八寸鼻の中へさし入るゝ〳〵血出て甦男ハ左
の鼻孔へ入れ女ハ右の鼻孔へ引へさし入るべし

此扁鵲傳なり

五民養要

○溺水して死するハ
塩を腑の中へ入るべし

救急方

○又方
石灰を布切に包て尻の穴へさし入れ灸す

千金方

○又方
竈灰三石に病人を埋るべし水出て活

金匱要略

○又方
梁上塵 梁の上の鼠の孔へ吹入て

本草

○高き所より墮大木大石に打れ或ハ馬より落ハ
病人の口鼻眼の上に風ろうきてやうすす物と
ろの息の出ざるやうにして墨灸すれば
息出るなり息出眼開ハ使さ小便をのまを
灸し

千金方

○高き所より墮絶入らんとして言るゝごとハ

醫学六要

急に使さ小便のまをせて
○冬日凍死て四肢直こ口噤少し息ぐるわるハ
大釜にて灰をあつく炒袋に入て心上に熨て

冷れば換ゑて眼開息出て後粥清を少つ用て
少しも火入て温れば早速に死を

壽世保元

○又方

急に地を深さ二尺ばかり長さ六七尺に堀て炭を
多く火をおこして彼穴の中に焼て穴の中に
くゆらせまりさるは火を取のけ莚を敷て其上
に病人を臥させ上に物を多くかけて墨を多く
汗を多く出てしまう

庚堅志

●中惡

○死人の氣にあたれ或は墓に行などして死人の毒氣
にあたり腹痛する
鍋墨五匁塩を白湯にのませよ

千金方

○又方

塩赤くなるまで炒て酒にそのまゝ飲て瘀血を
下す

乾坤生生論

○夢を見て覺ても身に青きあとのこるには
塩水のみてよし

教志方

●雜病

○流涎ニハ
伏龍肝　かまどの中の灰の粉にして煮てそそりけてう　千金方

○又方
生姜のしぼり汁つけてう　易簡方

○轉筋腹ニ入痛ニハ
墨を酒にそのてう　肘后方

○脚氣ニハ
毎夜塩を腰膝にもりて毎夜熱き湯にて

の甲まで浸してくわてびべ　救急方

○消渴して水を飲ニハ
五倍子　女のもぐろつくる時つくるもの　水にそのてよ　危氏得効方

○手足の霜腫ニハ
山藥竹の葉にそこをぬりてう　儒門事親

○耳の霜腫ニハ
生姜をしぼり汁にてつけてう　假日記

○世間に流行病わつとさうてぬる方
新しき布の袋に大豆を入れ一夜井に中ニ入れ

蘇葉日取半一人より七粒づつのむべしやりやまうへ

領要

○又方

新しき布袋より赤小豆を入れ井の中に三日浸し

出して三日目の夜取出して家内の人不残新汲

水にて東に向ひ男は三十粒女は二十粒づつ三日

のむべし流行病うつるべず

医統

○疫病うつる府

鞦韆山　如此紙に書て門口にはれば疫病

○一年中流行病にかからざる方

正月朝日の内赤小豆十四粒胡麻

七粒井戸中へ入るべし其水を飲べし年中

かゝらず

五行書

○又方

元日東に向ひて蕪菁小豆をのむべし年中

病なし

本草

○又方

立秋日七月の酢に向ひて朝の一番水にて赤小豆七粒のめば年中病病ともづるなり　本草

○瘰癧には
芥子の粉醋と酒とにて貼てよし　肘後方

○又方
五倍子　うのくろつて醋にてつけてよし
破ハ蠟ぬりてとめる事　魯府禁方

○身面に疣出来るには
醋に石灰を浸して上汁をぬくつけては　千金方

○竹木刺肉たらたらるには
頭垢ぬりてよし　劉涓子

○又方
梅干の肉をぬりてよし　梅師方

○又方
生姜　橘皮　塩等分水にて煮つめてぬれば
即出る　医統

○又方
胡椒の粉食粒にぬりてよし　房科準繩

○人の咬付て痛まハ
皿ま熱き小便入て一夜ひたすてよし　頓医要法

○陰嚢ちぢりまりて痒まハ
五倍子　女のくろ髪とりつけてよし　本草

○物身ま風多くつきて後まハ血肉壊痛痒まハ
醋ま塩を入まとんどのみてよし　奇疫方

○小便の中まり屎出大便ま小便を出すまハ
舊樸頭黒焼にして酒かて五分許のむべし　怪病單

○焼死て息いまだきるまハ

○鍼を左へ折込まるまハ
何鳥の羽根まそし四五枚黒焼かして醋かて
き折まる鍼の上ま貼紙かてまるして墨べ
折まる針自出　千金　鍼灸取法

○又方
象牙ま屑かまそつけてよし　財後方

○灸していたがらねハいたがらんと思ま
故草履のまらを火かてわまてかまわぢり灸

の上とおつまバ三日の中にいのよ　甲乙經

○五穀其外一切の食物をくらひ絶もまよ病るくる
足て力ゝを養さの方
白米　麦米を井籠よ入百度蒸て亜一握
づ毎日水おて三十日のうで死まて一切の食
物らくらくうげ　壽世保元

○又方
黒大豆　くゝりて一日食物をくらす　翌日
かの黒大豆食て外の食物を食まらく渇時
ハうをのむべし　此一年程をれて後ハ
一切の食物を食うまくて仙人とうう　博物志

○又方
黒大豆五合胡麻三合水よ一夜浸し蒸ゑ三度
扱らく干て二色ともにくゝまて皮と取つき
ぐゝ搗れ大よつくれ飯の中に入て戌の刻
うり子の朝まて蒸して翌日寅時よ取出
日よ干付て食ゑ　拳の大よつくれくうと
まつ食へて七日飢ず二ツ食へて四十九日飢ず

三ツ食へて三百日飢ぶ四ツ食へて二千四百日飢と頼
飢かとろへぶ手足の働少と變事也　王氏農書

私云右三方ハ唐土ゆて飢饉の時ゆ多く人と
潛しろ名方るゆ米賈貴とろゆし人ハ
早く調合して用ゆ

○人の通ゆる谷又ハ井の中ゆ落入或ハ海上ゆて一
切ゆ食物をさ不ゆて命をつゆぎ居し五躰氣ゆ衰
ぶろ方

口ゆ唾をしいろゆてハのゆとゆ又なゆそハのゆ

ゆ知ぶをろゆ一日一夜ゆ三百六十度のゆろゆめバ
何十日ゆて也死ぶぶ　壽世保元

私云十箇年許已前ゆ予武州ゆ住し北常
ゆ心安く交ろ僧祈願ゆて七日斷食して
禮拜行道と同行の僧一人ゆり彼僧ゆ呑ゆ
唾とのみゆし方と教ゆ彼僧深く信じて
相勤し同行の僧ハ嘲笑て不用行法六日に至
て同行の僧ハ手足痛殊外ゆろゆし又唾
のみゆゆ僧ハつゆゆ變事なく行法ゆ

こうく成就し療り

○落下類

病人を正しくかしこまらせ正面より外の人類さを
のゝふ持上げ友の大指を病人の口へ入一指子に
ゝり上れば忽愈

外科正宗

○傳尸勞瘵病付て同の無き中に用ゆれば愈方

川椒内の白膜と目とを取捨て川椒の赤皮ばかり
火あてゝ炒汗を出して後よくこなし粉
にして式匁つゝ空心に食ハ湯おそのめん虫

くだりてよし

○男女前陰の毛に虱つくさを癢ハ
銀杏皮をとりて擦つけてよし

種杏仙方

○又方

六要

朱をとりつけてよし

六要

正德五年乙未二月吉日

書林

京姉小路通堀川東ヘ入町
中川茂兵衛板

妙藥不求人跋

不佞一日候油小路宰相公談迫
市今云日有人之急疾也畜藥難
設迎醫亦遥遠豈不大患哉予曰僕
毎閲方書易簡之方經驗之治
急疾者必錄之號妙藥不求人藏

寥中既久焉以呈云云深愛之而
加後序可傳不朽貴命不能辭
再校正以壽梓云爾

正德癸巳九月甲子

法橋 奈良宗哲